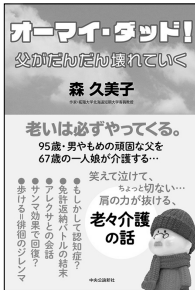




●書籍のご購入や内容等については最寄りの書店や発行元にお問い合わせ下さい



『オーマイ・ダッド！父がだんだん壊れていく』

森久美子 著

中央公論新社 刊

定価 1,870円 (本体1,700円+税)

認知症を患う95歳の父を67歳の著者が介護する日々を綴ったエッセーだ。現役時代は広告代理店で活躍したダンディな父はプライドが高く、健康で知的な自活高齢者の自負があるため、認知症になったことを受け入れない。しかし記憶障害によって言動はとんちんかんになっていく。同じ話を繰り返したり、ご飯の食べ方がわからなくなったり、子どもじみた駄々をこねるようになったり。著者は父の頑固さに閉口しながらも、相手をおだてたり叱ったりと丁々発止の応酬を続け、運転免許を返上させようとしたり、入浴させようとしたりと奮闘する。随所にユーモアが挟み込まれていて、父と娘のコミカルな攻防にクスッと笑ってしまう。達観した明るさが漂い、読後には切なく温かな思いが胸に広がる。

出口の見えない介護生活で心身ともに疲弊する著者は、苛立ったり傷ついたりしながらも、底なしの不安

の中で必死に父に寄り添い、理解しようとする。その姿が胸を打つ。父への罪悪感、感謝、尊敬の気持ちが通奏低音のように響いているのだ。

また本書には、人生と命の尊厳への問いも表れる。著者の息子は、おじいちゃんが同じ話を繰り返すのは「それが彼にとって人生のトピックだからだ」「その何が問題なのか」と著者に尋ねるのだ。この息子は、自分の祖父が記憶の回路を絶たれた脆い姿を晒すのを否定も肯定もしない。誰でも必ず老いる。配偶者や子どもなど大切な人を亡くした経験と様々な思いを抱えたまま、老齢になるまで生き抜いた、その命自体に尊厳が宿っているのではないかと、本書は静かに問い掛けている。

自らの老いへの恐怖、親の変貌に直面する悲しみと喪失感、そして介護疲弊は普遍的な問題だから、読めばだれでも著者への共感を深めるだろう。また本書は、疲労や怒りと適切に付き合うことが介護をなんとか続けるための秘訣だとも教えてくれる。

(日本農業新聞 齋藤 花)